



僅漢昨日府原雜誌
 社報報會之辛五季
 餘人土阻し農事難
 活比主津由山心海春
 年之滿場一物五痛
 激なる或決をなしたる
 唯今は新開國物也
 其又林高ニ集會
 し相る能事なり之等也
 全國各社の大扶助をな
 さんる洋洋矣了路付
 ニして信止金庫を考



多々の洋譯あり陸付
にしに位上層層ありき
提由ありは全國の同
陸新聞雑誌は一箇
に五對とし又陸海軍
中二十少し七十名の内
支那陸軍考あり
存記著し陸海軍
五對の譯決を在し進
歩是自らし陸海軍
提携ありは新居
外尖相居る所の
固く去秋を決せり
分りしに痛仕り
明白更に此事に同し
固く

かゝるに用はるる
明も更。此事に同し
海を舟し由然らば以所
は大隈の去就違
を賭しこの後の決心を
以て行房をなすは復た
や阿ともくかゝる存此
のき内岡の仰の永在
せられたるも別段異なす
あるまじしと存る故に伊
松一山の手を拍ちて嘆
ふを老ふれば殊に懐き
とは存る者大身若分
の存る知明の内岡
に白の住退を賭して元
我も之あるを以て存る

ふを老ふれば殊に懐き
とほ有りて昔大身若各
の存る如明の因縁
に海の住退を購して元
節も之をた切縁は之

十首
志願電

大義長老の書

平生の志願を致し右の如く可成り得
て之を以て其の如く之を其の
新田に於て三回居り難
に著し居りて其の如く在りて
し其の如く其の如く

志願人重口平の書

之明以事凡邪之万世の
新田江安屋三河屋雅治
江若屋三河屋在武段
し序えり書用い重し

志破人重口平より我
因具三言向此の包
ノ其山心者方
乃年重
廿日
大隈の月六